

kg/m³と仮定)第2表である。実際には海風は200m前後のところでも最も強いことも報告⁴⁾されているので、地上の値だけで求めることは誤りである。また雲の厚さは約900mであり、高積雲の最多頻度含水量0.1g/m³を¹/₄を用い、雲域を21時の値(およそ6.59×10⁹ m²の¹/₄)とすると海風の高さを300mぐらいに考えるとよい。これは実際の海風の高さとおおよそ一致するので下層からの輸送と考えてよいだろう。

7. 駿河湾を中心とした地形の効果

静岡県の駿河湾に面した安倍川、大井川などの川の流域ではしばしば5、6月頃に低層で、北東風がこのような形で流れこんでくるような気象状況の時に雹をとまなう雷雨の発生することがある。この場合の上層の気象条件は本文とは全く異なり、寒気の構造は850mb~700mbぐらいまでは傾斜が大きい、それから上は鉛直に近く高高度層(300~200mb)では谷の前面に対応⁶⁾している。地形の影響のないところでは当然地表層付近も寒気内に入るので大規模な積乱雲の発達はない。ところが駿河湾では伊豆半島で寒気の流入がさえぎられ温度が高く、水蒸気が多い空気を補給することができ、大きな積乱雲の発達に寄与していると考えられる。

8. 感謝

本報告の計算・製図などをしていただいた渡辺章子技

官にお礼申し上げる。また安斎予報課長には御閲読、御批判をいただいた。資料については日本航空株式会社からは航空機報告を、東京管区気象台内の気象官署からは地上観測値をいただいた。記してお礼申し上げます。なお本文の資料は筆者が慣熟飛行により得たものである。

文 献

- 1) Squires P. and J. Warner (1957): Some Measurements in the Orographic Cloud of the Island of Hawaii and Trade Wind Cumuli. *Tellus* **9**, 437~474.
- 2) Silverman B.S. (1960): The Effect of a Mountain Convection. *Cumulus Dynamics* 4~27. Pergamon Press.
- 3) Saunders P.M. (1962): Penetrative Convection in Stably Stratified Fluids. *Tellus* **14**, 177~194.
- 4) 舟田正之 (1965): 富山県の海陸風について, 1965年秋季日本気象学会講演.
- 5) A.Kh. Khrigian (1963): *Cloud Physics*. Israel Program for Scientific Translations, Tersalem.
- 6) 中山章・渡辺章子 (1965): 総観的立場から見た対流雲の発達 (第8報)—中・低緯度における高高度まで発達する積乱雲の統計— 研究時報印刷中.

海洋研究船の船名募集

現在東京大学海洋研究所には、淡青丸(258トン)が所属し、全国海洋研究者の共同利用の研究船として、物理、化学、地質、生物、水産等海洋科学の各分野での基礎研究に活躍しています。今回同研究所にさらに3,200トンの大型研究船が所属することとなり、7月13日起工式を行いました。昭和42年5月竣工の予定です。この機会に同船の船名を募集することになりましたので、下記要領に従って、応募をお願い致します。採用された船名の応募者の中から1名を抽選し、謝礼金を贈呈致します。

応募要領

1. 官製はがきに、氏名、住所、職業、船名を1つ、お書き下さい。
2. 船名は、……丸として下さい。
3. 1人でいくつ応募されてもかまいません。
4. 送付先は、東京都中野区柴町通1の28 東京大学海洋研究所 庶務係
5. 締切は、昭和41年9月30日。同日消印のものまで有効です。
5. 選考は海洋研究所で行います。